

## 合唱作品としての《レクイエム》

——21世紀に演奏・創作することの意味——

秋岡 陽

Yo Akioka

「わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている」(ヨハネによる福音書 15:4)

《レクイエム》というタイトルをもつ宗教作品は、今日、演奏会でしばしば取り上げられる。フェリス女学院大学音楽学部でも、1995年と1997年にフォーレの《レクイエム》を、2001年にはデュリュフレの《レクイエム》を学内演奏会で取り上げてきた。しかしそれがどのような作品なのか、つきつめて考えられていただろうか？ 日頃から「声楽作品を演奏するときには、その歌がどのようなメッセージを伝えようとしているのか、きちんと知ったうえで演奏しよう」と話しており、授業のなかでも《レクイエム》とはどのような音楽作品と理解して演奏すべきなのか、共に考えてきた。ところが、きちんと勉強しようとしてもレクイエムは分かりづらい。いろいろな作曲家の作品を調べても、作品によって楽章構成は多種多様、歌詞もいろいろ。さらに歌詞の勉強をしてゆくと、現代では理解しがたい、恐ろしい内容の歌詞も出てくる。レクイエムについてきちんと理解し、現代においてなおかつメッセージ性をもった音楽作品として演奏することは難しい。

レクイエムとは何か？ それは一般に「カトリック教会の『死者のためのミサ』および『死者のためのミサ曲』のこと」と定義される。<sup>(注1)</sup> ローマ・カトリック教会のミサは、種々の機会に挙げられるが、とくに死者を記念して挙げられたミサがレクイエムと呼ばれた。それは死者のためのミサの最初の入祭唱の歌詞が「レクイエム(安息を) Requiem」という言葉で始まることによる呼称である。

ここでまず確認しておかなくてはいけない大事なことは、レクイエムはあくまでも典礼であり、本来コンサート用の作品だったわけではないということである。レクイエムはあくまでもミサとよばれる典礼の一種であり、それは「み言の典礼」と「聖餐」とからなる。したがってそこで演奏される音楽も、典礼の枠組みによって規定される。けっして自由作曲による宗教的な作品として作られてきたわけではない。

また、「ミサ」という儀式の中で演奏される音楽をいくつかピックアップして合唱組曲化したものを「ミサ曲」とよぶが、死者のためのミサで演奏されるべく作られた合唱曲を組曲化した音楽作品も《レクイエム》と呼ばれた。通常演奏会でとりあげられるのはこのミサ曲としてのレクイエムである。そしてこの演奏形態はこの音楽作品本来の演奏形態ではない。

死者のためのミサ（レクイエム）は、どのような機会に挙げられた儀式なのだろうか？ レクイエムは、信徒の埋葬の日にまず行われ、さらに埋葬の3日後、7日後、30日後、そしてあとは1年後、2年後……と挙げられた。また、11月2日の「死者の日 commemoratio omnium fidelium defunctorum（諸魂日 All Soul's Day）」には、世を去った全信徒を記念してレクイエムが執り行なわれた。

日本ではかつて、レクイエムのことを「鎮魂ミサ曲」と訳したが、これは適切な訳ではない。鎮魂は「たましずめ」とも読む。それは、あらゆる死者の霊を慰め鎮めること。非業の死を遂げた人の魂が怨霊となって祟るという御霊信仰にも通じる。しかしレクイエムにはそのような意味合いはない。レクイエムは、死者の霊に直接語りかけるものではない。すべての人間が必ず経験する誕生と死——その死を迎えた人を、今、恵みに富む神のみもとに委ねようというのである。しかも同じ信仰の枝に連なった者の結びつきは、たとえ死をもってしても断ち切られることはない、ということを確認するためにレクイエムは挙げられる。そして福音に感謝し、死を契機に生の意味をより深くとらえなおそうとするのである。

#### 死者を記念するユーカリスト

「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」（ルカによる福音書 22：19）

レクイエムとは、死者を記念して執り行なわれるミサのこと。そこでは、パンとぶどう酒を共にいただき、一人一人の命がキリストとつながっていること、またそこに集う一人一人がひとつの交わりの中にあることを確認する聖餐の儀式が行われる。

しかし、埋葬の日にまでパンとぶどう酒の儀式を行うのはなぜか？という疑問もおこってくる。とくに埋葬の日のレクイエムともなれば、遺体が目の前にあるはず。そんな切迫した状況の中でもパンとぶどう酒の儀式をするのか？というのである。

しかし、信徒のつながりと交わりは死によってさえ断ち切られることがないことを確認するためにも、パンとぶどう酒による聖餐の儀式（ユーカリスト）は行われたのだった。死者を記念しつつユーカリストを行ったことは、すでに2世紀の文書に記録されている。初期のキリスト教徒にとって死は復活の希望に満ちたものだった。この世における死は、天国における誕生でもあった<sup>(注2)</sup>。また、当時の人にとって、生と死を区別する意識は現代の我々ほど強くなかった<sup>(注3)</sup>。死というリアリティを目の当たりにして、そのことから目をそらさず、むしろそれをきっかけに人間の地上における生の意味を深く考える——その意味で、レクイエムは他のどんな儀式よりも強く、生かされてあることの意味を意識するものだったのである。

死者を記念するユーカリストの礼拝式は、その後の長い歴史の中でスタイルを変えつつ、そこにさまざまな希望や恐れをこめて行われることになる。臨終にあって祈り、死者を篤く葬り、遺族を慰め力づける。それはどの時代にあっても人間の基本的な大切な営みである。そうした折に、古代から中世の人々は実に多くの歌をうたった。そしてある時は死の床にある者の声にならぬ祈りの声を代弁し、ある時は死という現実を前に狼狽する人々を勇気づけ、ある時は遣された者たちを慰めたのである。そうした歌と祈りのテキストが集積する中から、やがてレクイエムという儀式的複雑な次第が出来上がり、そこで歌われるレパートリーが形成されてゆく。

古代から中世にかけて、この死者の記念の儀式の中に、恐れが感情が強く移入される。とくに中世後期には、「煉獄」という考えが広く行われた。煉獄とは、死後すぐに天国へ行けない魂が、最後の審判の時まで置かれ、生前におかした小罪のために責め苦を受けるとされた場所。中世には、信徒教育の目的から、こうした煉獄や地獄についての話が繰り返し説かれた。その結果レクイエムには、煉獄や地獄に対する恐れ、死後の魂の行き先をめぐる不安が染み付くことになった。また、煉獄にいる死者のために繰り返しミサを行い、その苦しみが少しでも軽減されるように祈るようになる。

レクイエムは中世にきわめて頻繁に挙げられたミサの一つである。中世の大聖堂の内部には、寄進者による側面小礼拝堂がいくつも作られた<sup>(註4)</sup>。こうした寄進による供養礼拝堂は、個人やその遺族の寄進で作られ、そこには場合によっては専属の司祭が雇われて、寄進者の魂の救いのために、毎日のようにレクイエムが唱えられたのである<sup>(註5)</sup>。

レクイエムの聖歌の最初の楽譜資料は、10世紀頃のものが残っている。グレゴリオ聖歌だけでなく、アンブロシウス聖歌、古ローマ聖歌などでも、それぞれのレパートリーが形成された。一方ローマ・カトリック教会では10世紀から14世紀に急速に聖歌レパートリーを増やす。そのさい、古代の葬儀の特徴だった「復活の希望」のモチーフが薄れ、「恐れ」のモチーフが強くなっていったのだった。それは、この時期に歌われるようになった《怒りの日 Dies irae》の歌詞に特徴的に反映されている。

13-14世紀には個人的な代願のミサが大流行したが、その後教会は、レクイエムの使用と、それに関連した聖歌の使用を制限することになる。トリエント公会議(1545-63)以降は、それまで地方習慣によって多種多用だったレクイエムの典礼文も整理されることになった。この時できた式次第の枠組みが、以後の時代、多くの作曲家たちが合唱用《レクイエム》を作るときの基本になる(47ページの表参照)。

なお、同時代の宗教改革者は煉獄の恐怖を認めなかったため、プロテスタント地域では原則として《レクイエム》は作られなかった<sup>(註6)</sup>。一方カトリック側は、こうしたプロテスタント側と意図的に対抗するかのようになり、「煉獄」「地獄」「最後の審判」といったモチーフを強調したレクイエムを整備・制定してゆくことになる。

このとき制定されたテキストが、16世紀末以降に作曲された合唱用《レクイエム》の歌詞として使われ続ける。その状態は20世紀まで続いた。しかし20世紀になり、400年近くにわたったその伝統が大きく変わる。第2ヴァチカン公会議（1962-65）で、死者のためのミサから中世的な要素を取り除き、むしろキリスト者の死の理解における復活の希望が強調されることになったのである<sup>(注7)</sup>。その結果、現在CDショップに並ぶ《レクイエム》のほとんどは、現行の典礼とは一線を画す、もっぱら音楽史的関心から聞かれ演奏されるものになった。なお第2ヴァチカン公会議後に刊行された新しい聖歌集『Graduale Sacrosanctae Romanae Ecclesiae』（ソレム、1974年）<sup>(注8)</sup>などでは、逝去者のためのミサ（同書669ページ以降）において、聖歌の選択にかなりの自由が認められている。中世のレクイエムで歌われた「恐い」内容の聖歌がほとんど姿を消し、別の聖歌に差し替えられている<sup>(注9)</sup>。

### レクイエムの基本構造

「だれでも、自分をよく確かめたうえで、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです。……わたしたちは、自分をわきまえていれば、裁かれはしません」（コリントの信徒への手紙一11：28～31）

数年前、ある合唱団の企画担当者から次のような質問を受けた。「若手の現代作曲家に《レクイエム》を委嘱したいのですが、どの歌詞を作曲家に渡したらいいですか？ いろいろな作曲家の《レクイエム》を調べたのですが、歌詞がそれぞれ違って、どれを使っていいのかよく分かりません」。第2ヴァチカン公会議以前のラテン語歌詞の《レクイエム》を「演奏」することにとどまらず、さらにその歌詞を使って新曲を「作曲」しようとしていることは驚きだった。

古来のラテン語歌詞をもとに現代なお《レクイエム》を作曲するという問題はさておきとして、いろいろな作曲家の《レクイエム》の楽譜を調べると、歌詞の選択が多種多様だという印象をもつ、というのは皆が経験することである。では、伝統的な《レクイエム》の歌詞はどのように構成されているのだろうか？

「死者のためのミサ」も、あくまでも「ミサ」の一種である。その式次第はミサのそれに準じる。つまり、「固有文」と「通常文」とから構成され、「導入」→「み言の典礼」→「聖餐」というミサの一連の流れが基本構造になる（この件に関しては拙稿「ミサとミサ曲——その基本構造と、現代プロテスタント教会の礼拝への応用——」本紀要第4-5号合併号収載を参照）<sup>(注10)</sup>。ここで重要なのは、数楽章からなる合唱組曲としての《レクイエム》は、あくまでも「死者のためのミサ」という祭儀を構成する「部品」の断片集にすぎないということである。多数のピースからなるジグソーパズルのうち数ピースだけを取り出して並べ、全体像を思い描こうとしても無理

なように、CD に録音された《レクイエム》楽章だけを並べて聞いても、死者のためのミサの全体像は浮かばない。全体像を知るためには、多少複雑になるが、全ピースを順番に並べてみる必要がある（表参照）。

表 レクイエムの基本構造

	一般的なミサ		死者のためのミサ（レクイエム）		
	固有文	通常文	単旋律聖歌だけで行う場合	モーツァルトの曲を使う場合	フォーレの曲を使う場合
↑ 導 入 ↓	【入祭唱】	【キリエ】 【グロリア】	→グレゴリオ聖歌 (グロリア・パトリ省略)	◎作曲	◎作曲
	集祷文		→グレゴリオ聖歌 →省略 →有	◎作曲 省略 有	◎作曲 省略 有
↑ み 言 の 典 礼 ↓	書簡朗読 【昇階唱】 【アレレヤ唱】 または【詠唱】 (+【セクエンツィア】)	【クレド】	→有 →グレゴリオ聖歌 →【詠唱】をグレ ゴリオ聖歌で →グレゴリオ聖歌 (《怒りの日》)	有 グレゴリオ聖歌 グレゴリオ聖歌 ◎作曲 (全6曲に)	有 グレゴリオ聖歌 グレゴリオ聖歌 グレゴリオ聖歌
	福音書朗読		→有 →省略	有 省略	有 省略
↑ 聖 餐 ↓	【奉納唱】 密誦 序唱	【サンクトゥス】 カノン 主祷文  【アニユス・デイ】	→グレゴリオ聖歌 →有 →有 →グレゴリオ聖歌 →有 →有	◎作曲(全2曲に) 有 有 ◎作曲(全2曲に) 有 有	◎作曲 有 有 ◎作曲 有 有
	【聖体拝領唱】 聖体拝領後の祈り		→グレゴリオ聖歌 →グレゴリオ聖歌 →有 →グレゴリオ聖歌 (【Requiescant in pace】)	◎作曲 ◎作曲 有 グレゴリオ聖歌 (【Requiescant in pace】)	◎作曲(上と1曲化) 有 グレゴリオ聖歌 (【Requiescant in pace】)
	ミサ閉祭後（赦祷式）				◎《Libera me》 ◎《In paradisum》

\*式次第は第2 ヴァチカン公会議以前のもの 【 】 = 歌われるもの ◎ = 合唱曲化されたもの

表の左欄の2列は、一般的なミサの式次第である。死者のためのミサも、基本的にはこの次第に準じる。ただしレクイエムでは一般的なミサと異なり、通常文のうちの「グロリア」と「クレ

ド」が省略されていることに注意されたい。さらに細部に関していうならば、「グロリア・パトリ」が省略され、「アレルヤ唱」が「詠唱」に変えられ、セクエンツィアとして死者ミサ独自の《怒りの日》が歌われ、アニウス・デイの歌詞の各行の最後の言葉が「dona eis requiem [sempiternum] (彼らに[永遠の]安息を与えてください)」に変えられ、閉祭の言葉が「Requiescant in pace (彼らが平安のうちに安息を得るように)」に変えられる。

トリエント公会議以降の数百年間、死者のためのミサの式文は、ほとんど変化しなかった。歌われたグレゴリオ聖歌も、基本的に同じ歌詞で歌われてきた。(ただし祈りや聖書朗読は、それが埋葬の日か、記念の日かで多少変化する)。グレゴリオ聖歌を歌いながら挙げられた場合の死者ミサの基本構造を、表の「死者のためのミサ(単旋律聖歌だけで行う場合)」の欄に示す。以下、この欄の内容に即して、レクイエムの聖歌の基本的性格について考えてみよう。

死者のためのミサの場合、入祭唱は「レクイエム(安息を)」という言葉で始まる、きまった歌詞の聖歌がうたわれた<sup>(注11)</sup>。たしかに入祭唱は固有文だが、そのミサが死者のためのミサである限り、歌詞はきまった同じものである。この印象的な冒頭の言葉がこのミサ全体の呼称になったことは、前述の通り。「永遠の安息 requiem aeternam」のモチーフは、「絶えざる光 lux perpetua」というモチーフとともに、このミサ全体を貫く標語になる。また「dona eis [requiem] 彼らに[安息を]与えてください」のように「彼ら」という複数形が使われていることも重要である。特定個人の死者のためでなく、すべての逝去者との連帯の意識のもとにミサは開祭されるのである。

死者のためのミサの「キリエ」は、この100年間ほどの慣習では、単純な繰り返しによる第6旋法のグレゴリオ聖歌が一般的に歌われてきた。単純な呼びかけではあるが、それが逆に強い呼びかけとなる<sup>(注12)</sup>。

集祷文に続く書簡朗読では、葬儀の時は「テサロニケの信徒への手紙一、4:13~18」、11月2日の「死者の日」に行われたミサでは「コリントの信徒への手紙一、15:50以下」が読まれた。いずれも「眠りについた兄弟が最後のラッパとともに復活する」というメッセージの箇所である。ミサの式次第中でも、とくにこの「み言の典礼」の部分は、人々の耳が聞くことに集中される瞬間である。そうした部分に挿入された昇階唱のグレゴリオ聖歌は、とりわけ感動的だった<sup>(注13)</sup>。昇階唱の前半のアンティフォナ部分では「Requiem aeternam 永遠の安息を」という、死者のためのミサの基本モチーフが再現する。昇階唱の後半部分では、詩編112編6~7(ヴルガタ訳111編7)が歌われるのがローマ典礼では一般的だった。「In memoria aeterna erit justus 正しい人として永遠に記憶されるでしょう」という感動的な部分である。

一般的なミサでは福音書朗読の前にアレルヤ唱が歌われたが、死者のためのミサなど悲しみのうちに挙げられるミサでは、喜びのアレルヤにかえて詠唱が歌われた。死者のためのミサの詠唱は「Absolve Domini 解き放ってください、主よ」というテキストで歌い始められる<sup>(注14)</sup>。死者の

ことを思うときに、復活の希望よりも、罪咎からの解放に関心が払われるようになったことが読み取れる聖歌である。最後の審判への恐れと、死後の裁きによる破滅への慄きは、続くセクエンツィア《怒りの日 Dies irae》でクライマックスに達する<sup>(注15)</sup>。この歌の冒頭旋律、そしてそのテキストは、中世末期以降 20 世紀に至るまで「最後の審判」「死」「破滅」の象徴として広く用いられ、音楽作品ではベルリオーズの《幻想交響曲 Symphonie fantastique》(1830) やサン=サーンスの《死の舞踏 Danse macabre》(1874) などでも効果的に使われた。

福音書朗読は、葬儀の時には『ヨハネによる福音書』11 章から、ラザロの死のくだりが読まれた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない」という有名な一節である。しかもそのあとの「このことを信じるか？」という問いかけが、この儀式に参列した人々へ信仰の告白を促す。いっぽう、11 月 2 日の「死者の日」には、同じ『ヨハネによる福音書』の第 5 章や第 6 章から、やはり「永遠の命」に言及した箇所が読まれた。信じて生きる者は永遠に死ぬことはないと約束する福音書のこれらの箇所は、今日音楽作品としての《レクイエム》が演奏されるときにも想起されるべき箇所だろう。こうした聖書朗読があつてはじめてレクイエムの音楽はいきてくる<sup>(注16)</sup>。

このあと、死者のためのミサは聖餐の部分へすすむ<sup>(注17)</sup>。「Domine, Jesu Christe, Rex gloriae 主イエス・キリスト、栄光の王よ」と歌う奉納唱<sup>(注18)</sup>のグレゴリオ聖歌も、中世後期に新しく死者ミサに入ってきた歌である。栄光の王に呼びかけつつ、地獄の罰から魂を解放してくれるよう嘆願し、奉納が行われる。聖変化の前後のサンクトゥスとアニュス・デイ<sup>(注19)</sup>は、ここ 100 年間ほどの慣習では、シラビックで非装飾的な旋律のグレゴリオ聖歌が歌われてきた。いっぽう聖体拝領唱では、入祭唱や昇階唱で歌われた「永遠の安息」「絶えざる光」というテキストがライトモチーフのように再現し、死者ミサ全体に完結性を与える<sup>(注20)</sup>。そして閉祭の唱和では、まず「彼らが平安のうちに安息を得るように Requiescant in pace」と唱えられ、それに対して「アーメン Amen」と答唱が行われた。

以上、伝統的な「死者のためのミサ」が、グレゴリオ聖歌を用いて挙げられた場合について説明してきた。このように単旋律聖歌を使って挙げられる形がレクイエムの基本であり、そこでは上述のような一定の歌詞による聖歌が歌われたのである。

### 合唱作品としての《レクイエム》

「生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるためです」(ローマの信徒への手紙 14 : 8~9)

レクイエムはもともとグレゴリオ聖歌を用いて挙げるのが基本だった。しかし時代が下ると、

聖歌のいくつかを合唱曲に差し替えることが行われた<sup>(註21)</sup>。そのさい作曲家たちは、前述の聖歌すべてを合唱曲化せず、かなり自由に選択して合唱曲化した。そうして作られた合唱部分だけがコンサートで演奏されたり、CD録音されるため、「レクイエムの歌詞はなぜあんなに一定しないのか？」という疑問がおこることになる。合唱曲化されなかった曲は歌われなかったわけではなく、グレゴリオ聖歌で歌われた。

さらに、レクイエム楽章を合唱曲化する場合、ミサ通常文だけではなくミサ固有文も合唱曲化することが行われた。一般のミサでは通常文の部分だけが合唱曲化されたが、死者のためのミサの場合は固有文も一定不変なので、ここも合唱曲化の対象候補になったのである。そのため、合唱曲化の対象となる曲の選択の幅が広がり、それだけ多様な《レクイエム》楽曲が作曲されることになった。

例として、モーツァルトの音楽を使った場合と、フォーレの音楽を使った場合のレクイエムの次第を、表に示した。作曲家があらたに作った部分は◎の記号で示している。この表を見てまず分かることは、コンサート会場で聞かれる《レクイエム》の上演形態は作曲家の意図を反映していない、ということである。たとえば演奏会ではフォーレの作品のキリエと奉納唱は連続して演奏されるのが通例だが、実際の儀式ではこれら2曲の間にはかなりの時間的・意識的隔りがある。実際の儀式では、キリエのあと、集祷文、書簡朗読、昇階唱（グレゴリオ聖歌）、詠唱（グレゴリオ聖歌）、セクエンツィア（グレゴリオ聖歌）、福音書朗読があり、その後ようやく奉納唱に到達するのである。とくにその間に「永遠の命」に関する聖書朗読があることは重要である。そのメッセージを聴いてから演奏される奉納唱と、聖書のメッセージを聴かずに演奏される奉納唱とでは、その効果に大きな違いを生じる。

表の二人の作曲家の◎の記号を比べてみると、また別の新しい発見もある。それは作曲家がどの部分を新作するかによってレクイエム全体の印象が大きく変わることである。モーツァルトは《怒りの日》をとくにクローズアップして作曲した（全6曲にまで拡大して作曲している）。その結果、最後の審判の場面は強調され、緊迫感のあるレクイエムに仕上がっている。いっぽうフォーレは《怒りの日》をあえて新作することはしない。その結果、フォーレの作品を聞くと、死への恐怖が強調されず、むしろ天国的な透明感のあるレクイエムに仕上がっているのである。なお、これと関連して、フォーレがミサ終了後の赦祷式 *absolutio* の聖歌も作曲していることが注目される。表中の最後の2曲がそれである。ミサ閉祭後、葬列が墓場へと向かう前に行われた最後の祝福の儀式で歌われたこれら2曲を、フォーレはあえて《レクイエム》に加えた。とくに最後の《天国に *In paradisum*》は、逝去者の魂を天使たちが天国へと導き、聖人たちと天使の大群が天国で出迎え、そこで永遠の安息を得ることが出来ますように、と祈る歌で、そこでは天国における新しい生への希望が歌われた。



以上、本稿では、《レクイエム》という音楽作品がどのようなものであるのか、死者のためのミサという典礼との関係で考えてきた。では、これからの時代、この《レクイエム》という音楽作品とどのようにつきあったらよいのだろうか？

《レクイエム》という音楽作品は、今後も、過去の伝統遺産のひとつとして、とくに音楽史的関心から演奏されることがあるだろう。しかしその場合も、そこにしみついてしまった中世的な特別な信仰理解について、客観的に批判できるだけの十分な注意と配慮が必要である。それをせずにただ演奏するだけでは、現代的なキリスト教理解への誤解を生じかねない。

まず、中世特有の「恐れ」の感情については、それがその時代・社会に特有なものであったことを理解し、一定距離をおかなくてはならない。鎮魂（たましずめ）の意図もそこにはない。そうした恐怖感についての誤解は、今後この曲を演奏する人たちのあいだに広まることのないよう、配慮する必要がある。むしろ、「死によっても信仰の絆は断ち切られない」というメッセージの意味を今一度考えて演奏する必要がある。死と出会うことによって、生の意味を考える。あるいは、死を通して永遠の命について知る。そのためにも、音楽作品として《レクイエム》を演奏するさいには、ぜひとも聖書朗読を途中にはさみたい。あるいはプログラム冊子に「永遠の命」に関する聖句を印刷して配ることが望ましい。

なお、レクイエムは今日では、テキストの上でかなり自由に選択のできる幅をもったジャンルになってきている。今後なんらかの事情で作曲をするような場合には、死者と生きているものとの交わりを基本にし、遺された者を慰め力づけ、死と永遠の命に対する希望や肯定的要素を強調した楽曲として再構築してゆく必要があるだろう。そしてさらにそれがラテン語ではなく、母語で歌えるようになれば、現在そして将来にわたっても意味ある創作ジャンルになる可能性がある。

(注1) 佐々木勉「レクイエム」『新編 音楽中辞典』（音楽之友社、2002年）、762ページ。

(注2) J.F. ホワイト『キリスト教の礼拝』越川弘英訳（日本基督教団出版局、2000年）、428-429ページ。

(注3) J. ハーパー『中世キリスト教の典礼と音楽』佐々木勉・那須輝彦訳（教文館、2000年）、191ページ。

(注4) ハーパー、前掲書、45ページ。

(注5) ハーパー、前掲書、191ページ。

(注6) ルター派では、免罪符を否定するだけでなく、それと直接的に関連してくる煉獄というものの考え自体を否定する。煉獄に関する直接的な記述は聖書にない。したがって、煉獄で苦しむ死者の霊の救いを求めて代願するというレクイエムの発想自体も成立しない。なお、ピューリタンのなかには、葬儀そのものを現世的なもののみならず傾向もみられ、葬儀の式文もあまり作られなかった。

(注7) 典礼憲章第81条に次のように述べられている。「葬儀は、キリスト信者の死の復活的性格をより明らかに表現し、典礼色も含めて、各地方の状況と伝統に、よりよく適応したものでなければならない」（『典礼憲章』日本司教団秘書局訳、カトリック中央協議会刊行、1968年）、39ページ。

- (注 8) *Graduale Sacrosanctae Romanae Ecclesiae de Tempore & de Sanctis*. Tournai: Desclée, 1974.
- (注 9) 1974 年の同書では、死者を記念してミサをあげるさいの聖歌として、7 曲の入祭唱、6 曲の昇階唱、5 曲のアレルヤ唱、4 曲の詠唱、7 曲の奉納唱、10 曲の聖体拝領唱がリストアップされており、従来必ずしも死者の典礼とむすびつきをもたなかった聖歌も多数含まれる。
- (注 10) 秋岡陽「ミサとミサ曲——その基本構造と、現代プロテスタント教会の礼拝への応用——」『フェリス女学院大学音楽学部紀要』第 4-5 号合併号 (2000 年 3 月号)、131-144 ページ。
- (注 11) レクイエムの入祭唱のテキスト (第 2 ヴァチカン公会議以前) については、付録の歌詞対訳参照。なお、一般的なミサにおける入祭唱は「アンティフォナ→詩編→グロリア・パトリ→アンティフォナ」の形をとるが、レクイエムの場合はこのうちのグロリア・パトリを省略して歌われる。詩編部分は、詩編 65 (ヴルガタ訳 64) の一節を歌う。この詩編はもともと収穫の歌であるが、ここではシオンの神への帰還のイメージが、天国への帰還 (あるいは中世的にいうなら神の裁きの座の前への召還) のイメージと二重写しになって聞こえる。
- (注 12) レクイエムの場合、キリエのあとのグロリアは省略される。
- (注 13) レクイエムの昇階唱のテキスト (第 2 ヴァチカン公会議以前) については、付録の歌詞対訳参照。
- (注 14) レクイエムの詠唱のテキスト (第 2 ヴァチカン公会議以前) については、付録の歌詞対訳参照。
- (注 15) 《怒りの日》のテキストについては、付録の歌詞対訳参照。
- (注 16) *Liber usualis* (Solesmes, 1896; Reprint, Tournai: Desclée, 1953)によると、レクイエムにおける聖書朗読箇所は、次のように指定されている：
- 葬儀の場合：書簡朗読＝テサロニケ (一) 4：13-18、福音書朗読＝ヨハネ 11：21-27
- 逝去した全信徒のために行われる場合：書簡朗読＝コリント (一) 15：51-56、福音書朗読＝ヨハネ 5：25-29
- 特定個人の記念として行われる場合：書簡朗読＝マカベア書 12：43-46、福音書朗読＝ヨハネ 6：37-40
- 死者を記念する通常のミサの場合：書簡朗読＝ヨハネ黙示録 14：13、福音書朗読＝ヨハネ 6：51-55
- (注 17) レクイエムの場合、福音書朗読のあとのクレドは省略される。
- (注 18) レクイエムの奉納唱のテキスト (第 2 ヴァチカン公会議以前) については、付録の歌詞対訳参照。
- (注 19) レクイエムの場合、アニウス・デイの通常文テキストに一部固有の言い回しを生じ、「miserere nobis」→「dona eis requiem」、「dona novis pacem」→「dona eis requiem sempiternum」のように変更して歌われる。付録の歌詞対訳参照。
- (注 20) レクイエムの聖体拝領唱のテキスト (第 2 ヴァチカン公会議以前) については、付録の歌詞対訳参照。
- (注 21) ルネサンス初期まで、レクイエムはあまり合唱曲化されなかった。厳粛な儀式に華やかな合唱効果がふさわしくなかったのかもしれない。ルネサンス時代にはデュファイがポリフォニーのレクイエムを作った記録が残っているが、作品自体は現存しない。作品が残る最古の例はオケゲムのレクイエムである。トリエント公会議以前につくられたこの作品は、昇階唱 (Si ambulem in medio) や詠唱 (Sicut cervus) の歌詞が後の時代ものと異なっており、また作曲されて残された楽章数も少ない。ルネサンス後半、1500 年代になると、合唱作品としてのレクイエムの数が増す。当時作られた作品は、同時代の他のミサ曲に比べ、古風な様式をとる傾向があった。また、合唱曲化する楽章の選

扱に関して作曲家がまちまちな方向性を示すことは、当時からすでにレクイエムの特徴だった。

1600年以降、バロック時代になってからも、ことレクイエムに関しては古風な対位法書法を好む傾向が続いた。いっぽう、バロックの新様式によるレクイエム楽曲が演奏された最古の記録としては、1621年にヴェネツィアで行われたメディチ家のコージモ2世の葬儀で演奏されたとされるモンテヴェルディの楽曲のことが知られているが、作品自体は失われた。バロック後期になると、ハッセなどの流行オペラ作曲家たちがレクイエムを書くようになり、レクイエムは劇場音楽化の傾向を示す。作品規模は大掛かりになり、独唱者の歌唱技巧を誇示する要素も入ってくる。

古典派時代の作品としては、モーツァルトの作品が最も有名。モーツァルト自身が死んだため未完で残され、のちにジュスマイヤーによって完成されたことでも知られるが、補綴によって生じた様式的アンバランスを補って余りあるだけのインパクトをもった作品である。

19世紀初頭に作曲されたケルビーニのレクイエム（ルイ16世追悼）以降、作品の巨大化が顕著になる。19世紀の二大レクイエムであるベルリオーズの作品とヴェルディの作品は、典礼の枠組みを逸脱するほどの大規模化を示した。いっぽう音楽会場向きのオラトリオ風レクイエムが、サン＝サーンス、ドヴォルジャークらによって作られる。ブルックナーによる典礼的な作品、ブラームスによるルター訳聖書からの引用による独自の《ドイツ・レクイエム》（非典礼用）も注目される作品である。

近代作曲家のレクイエムでは簡素さも追及され、代表作品にフォーレとデュリュフレのものがある。さらに20世紀には多様なレクイエムが書かれ、あるものは大規模な交響的な響きを追及、あるものは典礼での使用を意識した簡素な響きを追及した（チェーチーリア運動も影響）。典礼の枠組みを逸脱する作品が多数生まれるようになったのも20世紀の特徴である。この時代の作品としてはブリテン、リゲティ、ストラヴィンスキーなどのものがよく知られる。

[付録：レクイエムの歌詞対訳 訳・秋岡陽]

**Missa pro defunctis**

**死者のためのミサ**

**Introitus**

**入祭唱（イントロイトゥス）**

Requiem aeternam dona eis Domine,  
et lux perpetua luceat eis.

永遠の安息を彼らに与えてください、主よ、  
そして絶えざる光が彼らを照らしますように。

Te decet hymnus, Deus, in Sion,  
et tibi reddetur votum in Jerusalem.

あなたに、神よ、シオンでは賛美を捧げます。  
そしてあなたに誓いは果たされず、エルサレムの地で。

Exaudi orationem meam:  
ad Te omnis caro veniet.

どうか聞き入れてください、私の祈りを；  
あなたのもとへ、すべての肉は行くのです。

**Kyrie**

**キリエ**

Kyrie, eleison.

主よ、あわれんでください。

Christe, Eleison.

キリストよ、あわれんでください。

Kyrie, Eleison.

主よ、あわれんでください。

### Graduale

Requiem aeternam dona eis Domine,  
et lux perpetua luceat eis.  
In memoria aeterna erit iustus,  
ab auditione mala  
non timebit.

### Tractus

Absolve Domine animas omnium fidelium  
defunctorum ab omni vinculo delictorum.  
Et gratia Tua illis succurrente,  
mereantur evadere iudicium ultionis  
Et lucis aeternae  
beatitudine perfrui.

### Dies irae

Dies irae, dies illa,  
Solvat saeculum in favilla:  
Teste David cum Sibylla.

Quantus tremor est futurus,  
Quando iudex est venturus,  
cuncta stricte discussurus!

Tuba mirum spargens sonum  
per sepulcra regionum,  
coget omnes ante thronum.

Mors, mors stupebit et natura,  
cum resurget creatura,  
judicanti responsura.

Liber scriptus proferetur,  
in quo totum continetur,  
unde mundus iudicetur.

Judex ergo cum sedebit,  
quidquid latet apparebit:  
nil inultum remanebit,

### 昇階唱 (グラドゥアレ)

永遠の安息を彼らに与えてください、主よ、  
そして絶えざる光が彼らを照らしますように。  
彼は正しい人として永遠に記憶されるでしょう。  
悪いしらせを聞くたびに  
恐れることも、もうないのです。

### 詠唱 (トラクトゥス)

解き放ってください、主よ。信じて世を去った  
すべての魂を、罪のしがらみから解いてください。  
あなたの恵みで、彼らの魂を助け、  
罪の裁きを受けることのないようにしてください。  
永遠の光の祝福を  
受けることができるようにしてください。

### 怒りの日 (セクエンツィア)

その日こそ、怒りの日。  
この世は灰燼に帰し、  
その様をダビデとシビラがみとどける。

畏れるがよい、  
裁きの主が来て、  
すべてを厳しく裁かれる。

不思議なラッパが鳴り響き  
全地の墓に鳴り渡るなか、  
すべての民は玉座の前に集められる。

死も自然も驚くなか  
被造物である人間は蘇り、  
裁きに答えるときがくる。

記された書物が前に運ばれると、  
そこにはすべてが書かれており、  
それによって世界は裁かれる。

こうして、裁きの主がその座に着くとき、  
隠れているもので、あらわにならぬものはなく、  
罰せられずにすむものは何ひとつない。

Quid sum miser tunc dicturus?  
Quem patronum rogaturus?  
Cum vix justus sit securus.

そのとき哀れな私は何を言うことができるだろう？  
誰に助けを求められるだろう？  
正しい人でさえ恐れるその時に。

Rex tremendae majestatis,  
qui salvandos salvas gratis,  
salva me, fons pietatis.

王よ、恐るべき威厳の王よ、  
救うべき者を救ってくださる恵みの方よ、  
どうか私を救ってください。慈悲の泉なる方よ。

Recordare Jesu pie,  
quod sum causa tuae viae:  
ne me perdas illa die.

慈しみ深いイエスよ、  
私のためにあなたが来たことを思い出し、  
その日に、私を滅ぼさないでください。

Quaerens me, sedisti lassus,  
redemisti crucem passus:  
tantus labor non sit cassus.

私を探し、疲れてあなたは座しました。  
十字架の受難によって、贖って下さいました。  
それほどの働きを、徒労にしないでください。

Iuste iudex ultionis,  
donum fac remissionis,  
ante diem rationis.

正しい裁きの主よ、罰をさだめる方よ、  
裁きの日のその前に、  
どうか赦しを与えてください。

Ingemisco, tamquam reus:  
culpa rubet vultus meus:  
supplicanti parce Deus.

私は罪人のようにうめきます。  
その過ちを思うとき、私の顔は赤らみます。  
神よ、哀願する者を慈しんでください。

Qui Mariam absolvisti,  
et latronem exaudisti,  
mihi quoque spem dedisti,

あなたはマリアを赦し、  
盗人に耳を傾け、  
私にも希望を与えて下さいました。

Preces meae non sunt dignae:  
Sed tu bonus bonus fac benigne,  
Ne perenni, ne perenni cremer igne.

私の願いはこの身に相応しくないもの。  
しかしあなたは善いものをくださる方。  
どうか業火で焼き尽くさないでください。

Inter oves locum praesta,  
et ab haedis me sequestra,  
statuens in parte dextra.

善い羊たちのほうに私を置き、  
滅ぼされる山羊から私を離し、  
あなたの右側に私を立たせてください。

Confutatis maledictis,  
flammis acribus addictis,

呪われ、押し黙らされた者たちが  
燃えあがる炎へと引き立てられるとき、

voca me cum benedictis.

どうか私を祝福された者とともに呼んでください。

Oro supplex et acclinis,  
cor contritum quasi cinis:  
gere curam mei finis.

私は哀願し、ひれ伏して祈ります。  
心は灰のように粉々です。  
私の最後の心配を、どうかかえりみてください。

Lacrimosa dies illa,  
qua resurget ex favilla  
judicandus homo reus:

涙にくれる、その日、  
人は塵から蘇り、  
裁きを受けるために引き立てられる。

Huic ergo parce Deus  
pie Jesu Domine,  
dona eis requiem. Amen.

神よ、この者をどうかかえりみてください。  
慈しみ深い主、イエスよ、  
彼らに安息を与えてください。アーメン。

### Offertorium

Domine, Iesu Christe, Rex gloriae,  
libera animas omnium fidelium defunctorum  
de poenis inferni,  
et de profundo lacu;  
libera eas de ore leonis,  
ne absorbeat eas Tartarus,  
ne cadant in obscurum.  
Sed signifer Sanctus Michael  
representet eas in lucem sanctam,  
quam olim Abrahae promisisti  
et semini eius.

### 奉納唱 (オフエルトリウム)

主イエス・キリスト、栄光の王よ、  
すべての亡くなった信者たちの魂を  
地獄の罰から解き放ち、  
深い淵から救ってください。  
彼らの魂を獅子の口から解き放ち、  
冥府がその魂を呑み込むことなく  
その魂が闇に陥ることのないようにしてください。  
むしろ聖ミカエルが旗手となって  
彼らの魂を聖なる光の中へと導いてください。  
主がかつてアブラハムに約束し、  
そして彼の子孫にも約束したように。

Hostias et preces Tibi,  
Domine, laudis offerimus.  
Tu suscipe pro animabus illis,  
quarum hodie memoriam facimus.  
Fac eas, Domine, de morte transire  
ad vitam,  
quam olim Abrahae promisisti  
et semini eius.

いけにえと祈りとを、  
主よ、賛美のうちに、私たちは捧げます。  
彼らの魂のために、それを受け入れてください。  
今日私たちの記念する、その魂のために。  
彼らを、主よ、死から  
生へと移してください。  
主がかつてアブラハムに約束し、  
そして彼の子孫にも約束したように。

### Sanctus

Sanctus, Sanctus, Sanctus  
Dominus Deus Sabaoth.

### サンクトゥス

聖なる、聖なる、聖なるかな、  
万軍の主である神

Pleni sunt caeli et terra  
gloria tua.

Hosanna in excelsis.

Benedictus qui venit

in nomine Domini.

Hosanna in excelsis.

### Agnus Dei

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,  
dona eis requiem.

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,  
dona eis requiem.

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,  
dona eis requiem sempiternum.

### Communio

Lux eterna luceat eis, Domine,  
cum sanctis Tuis in aeternum,  
quia pius es.

Requiem aeternam dona eis, Domine,  
et lux perpetua luceat eis,  
cum sanctis Tuis aeternum,  
quia pius es.

\*\*\*ミサ閉祭後\*\*\*

### Libera me

Libera me, Domine, de morte aeterna,  
in die illa tremenda,  
quando coeli movendi sunt et terra,  
dum veneris judicare, saeculum per ignem.

Tremens factus sum ego, et timeo,  
dum discussio venerit, atque ventura ira.

[quando coeli movendi sunt et terra,

Dies illa, dies irae,  
calamitatis et miseriae,  
dies magna et amara valde.

[dum veneris judicare

[saeculum per ignem.

天と地は、

主の栄光に満ちあふれる。

いと高きところにホサナ。

主の名によって来られる方に

祝福があるように。

いと高きところにホサナ。

### アニヌス・デイ

神の小羊、世の罪を除いてくださる方よ、

どうか彼らに安息を与えてください。

神の小羊、世の罪を除いてくださる方よ、

どうか彼らに安息を与えてください。

神の小羊、世の罪を除いてくださる方よ、

どうか彼らに、永遠の安息を与えてください。

### 聖体拝領唱（コムニオ）

永遠の光が、主よ、彼らを照らしますように。

あなたの聖徒たちと共に、永遠に。

主は慈しみ深い方でいらっしゃいますので。

永遠の安息を彼らに与えてください、主よ、

そして絶えざる光が彼らを照らしますように。

あなたの聖徒たちと共に、永遠に。

主は慈しみ深い方でいらっしゃいますので。

### リベラ・メ（レスポンソリウム）

私を解放してください、主よ、永遠の死から。

その恐ろしい日、

天と地とが震え動くその時、

主が来られて、この世を火によって裁かれる時。

私は恐れ、そしておののきます。

来るべき裁きの時、来るべき怒りの時。

天と地とが震え動くその時]

その日こそ、怒りの日、

災いの日、不幸の日、

おおいなる日、嘆きの日。

主が来られて]

この世を火によって裁かれる時。]

Requiem aeternam dona eis, Domine,  
et lux perpetua luceat eis.

Libera me, Domine, de morte aeterna,  
in die illa tremenda,  
quando coeli movendi sunt et terra,  
dum veneris judicare, saeculum per ignem.

### In paradisum

In paradisum deducant te angeli;  
in tuo adventu suscipiant  
te martyres  
et perducant te in civitatem sanctam  
Ierusalem.  
Chorus angelorum te suscipiat  
et cum Lazaro quondam paupere  
aeternam habeas requiem.

永遠の安息を彼らに与えてください、主よ、  
そして絶えざる光が彼らを照らしますように。  
私を解放してください、主よ、永遠の死から。  
その恐ろしい日、  
天と地とが震え動くその時、  
主が来られて、この世を火によって裁かれる時。

### 天国に（イン・パラディスム）

天国に天使たちがあなたを導いてくださいますよう。  
あなたがそこへ着くとき、  
あなたを殉教者たちが出迎えて、  
そしてあなたを連れて聖なる都エルサレムへと  
導いてくださいますよう。  
天使の群れがあなたを出迎え、  
かつて貧しかったラザロとともに、  
あなたも永遠の安息を得ることができますよう。